

保育実践センター「はまりす」立ち上げと初年度（令和5年）活動報告

Launch of the Childcare Practice Center 'Hamarisu' and First-Year Activity Report (2023)

筧 有子・那須 とよみ・中楯 有起・加子 美智留

要 約

本報告では、本学における保育実践センター「はまりす」の初年度の活動報告と参加した保護者及び学生への活動後のアンケートを通して1年目を振り返った。初年度は8月から3月に全14回を実施し、参加者は延べ178名であった。内容については、①指導員や教員の主導のもとに活動を準備して1・2年生がボランティア活動にて援助する、②演習系の授業内で準備を行なう、③3年生の子ども実践ゼミの活動、④4年生の卒業研究など様々な形で、「泡スライムづくり」「卵の殻のオブジェづくり」「秋祭り」「クリスマスコンサート」などが行われ、次第に自主的に参加する学生が増加した。学生アンケートでは、子ども理解や保育に関する記述が半数を超えた他、子育て支援の視点に関する記述もあった。保護者アンケートでは、子どもの成長を改めて第三者と分かち合う姿、学生ボランティアとの触れ合いに満足している姿が読み取れた。次年度以降に向けて、SNSの活用や学生と指導者の振り返りの機会を作っていくことが課題と考えられた。

キーワード：保育者養成、実践力向上、子ども理解、子育て支援、地域貢献

1. はじめに

1-1 「保育実践センター」立ち上げの経緯

本学では2013年度入学生から、大学の教育課程の一環としてDiCoResプログラムと名付けて「対話・協働・責任」の3つの重点項目によって学生が主体的に実践を成し遂げていく活動を推進してきた。その過程として、各授業で実践力向上に向けた様々な活動が行われている。これらの成果については、報告¹²³にも見られるところである。保育士・幼稚園教諭の資格免許を取得できる幼児教育・保育専攻でも、子どもと関わるボランティアを推奨するなど、実践力向上のプログラムを授業内に組み込んできた。しかしながら、近年の学生の傾向には次第に変化が見られ、実践力に関しての自信のなさが感じられる。兄弟の少ない学生の増加や地域のつながりの希薄

化により生活の中で未就学児と触れ合う機会が減少していること、デジタル世代の学生達にとっての直接的なコミュニケーションへの苦手意識などが一因であると考えられた。このような状況の中、2020年には新型コロナウイルス（COVID-19）感染症の流行により、ボランティアや実習の中止など実践力を磨く機会が大きく損なわれた時期を経て、その後に資格免許に関わる実習等が再開しても、本学の特色であった実践力の強みを活かすことが難しい状況となっている。

本学のボランティアについては、これまで野外活動センター、こども館、学童保育や保育園など、子どもに関するイベント等を行う外部施設に依頼しての参加を指導してきた。しかし、ボランティア受け入れ施設の職員とのコミュニケーションに自信のない学生が、

同時にその日出会った参加者と共に活動を行い、さらに保育等の実践力向上を目指すということにハードルの高さを感じる現状がある。そこで、学生自身にとって身近な大学内で、活動前後に相談できる指導員や教員の支援のもと、未就学児と触れ合える機能を新設することとした。

今回、本学における保育実践センター「はまりす」の初年度の活動報告と参加した保護者及び学生への活動後のアンケート記述を通して初年度を振り返り、本事業の意義を確かめ、それにより示唆されるこれからの方向性を検証したい。

1-2 愛称募集とロゴマークデザイン

立ち上げにあたって、学内公募にて保育実践センターの愛称募集を行ったところ、73の候補が集まった（表 1）。教職センター長、幼児教育・保育専攻長、教職センター委員 2 名、実習チューターの 5 名の検討会によって、その中から本学名称「浜松学院大学」の頭文字「はま」とキャンパス内に住んでいるリスに会いに来る気持ちで親子に通ってほしいという意図を込めて「りす」をつけたという

表 1 保育実践センター応募愛称例

たまご広場	ぞうのおやこ
あつまろう！たまりパッ！！	はまがく チルドラボ
ファミリーひろば	みんなのひろば
おいでよ おやこの森	わくわく親子広場
みかん公園	わいわいひろば
はまるんひろば	にこにこ親子ひろば
はまがくる	いちごの木
おやこのじかん	親子のやすらぎひみつ基地
あららひろば	ふわり
げんきっこひろば	ひみつ基地「もふもふ」
こどもいっぱいセンター	はまがくのおうち
あそびのおうち	ぼかぼかひろば
親子のあそび場	ゆくゆくひろば
わくわくらんど	季節と笑みの風
あそびっこひろば	ハビネスひろば
わくわくひろば	にこにこ広場
わんぱくひろば	にこにこひろば
みんなのHGUひろば	さんさんひろば
はまりす	おやこひろば
げんきっ子ひろば	ウキウキ広場

「はまりす」を選出し、この愛称を応募した学生の学長表彰と記念品贈呈を行った。

愛称決定ののち、「造形表現」の授業課題として学生達がロゴマークのデザイン原画に取り組んだ。その中から参考になるスケッチ数枚を担当教員が抽出してデザインの専門家にこれらを基にしたロゴマークの作成依頼を行った（図 1）。



図 1 保育実践センターロゴマーク
学生イメージ原画例と決定したデザイン

2.活動報告

2-1 概要

本事業は、1 歳以上未就学児とその保護者を対象に行った。8 月から親子の受け入れを開始し、8 月 9 月を第 1 期、11 月 12 月を第 2 期とした。また、第 2 期に参加していた乳

児の兄弟が参加を希望していると聞き、幼稚園児の参加しやすい春に第13・14回を企画した。実施内容については、①指導員や教員の主導のもとに活動を準備して1・2年生がボランティア活動にて援助する、②音楽や造形など演習系の授業内で企画や準備を行なって本番を迎える、③3年生のゼミ活動の一環として実践を行う、④4年生が個人として卒業研究の実践の場とするなど様々な形式で行われた。年間合計実施回数は14回、延べ参加者数は学生計55名、親子計123名であった。

また、当日の開始前には健康等の個票記入と保険料を含む参加費の説明等を個別に行い、保護者等への趣旨説明として「主に幼稚園教諭や保育士等を目指す学生が、地域の子どもや保護者と触れ合う事により、机上の学びから実体験を通して具体的な学びや将来の子育て支援者としての実像を培う場である事と、養成校としての地域支援の一端となれば幸いである」旨を伝えた。初回の8月8日には2社の新聞取材が入り、外部の注目度を窺い知ることができた。

表2 日程と参加者数

実施回	日程	曜日	テーマ	学生参加数	地域参加者数
1	8月8日	火	パネルシアターと泡スライム	6	14
2	8月22日	火	ペットボトルシャワーで遊ぼう	4	14
3	8月29日	火	プールで夏祭りをしよう	3	15
4	9月5日	火	秋祭りをしよう	2	6
5	9月12日	火	親子リトミック	2	6
6	9月19日	火	卵の殻のオブジェ作り	4	8
7	11月9日	木	牛乳パックの電車作り	3	8
8	11月16日	木	感触遊びをしよう	5	8
9	11月30日	木	秋の森へ遠足に行こう(音楽表現)	7	6
10	12月7日	木	クリスマスリースを作ろう	1	6
11	12月14日	木	風船マット遊び、サンタの箱人形作り	1	10
12	12月21日	木	クリスマスコンサート(楽器体験)	8	6
13	3月12日	木	センサリーボトル作り	4	6
14	3月26日	木	春祭り(木の道具、ミニコンサート)	5	10

2-2 実施内容

第1回 8月8日 第一会議室

〔ねらい〕初回なので、学生による主体的な実践体験と、参加者が家庭とは違う保育教材に出会う事で、親子で楽しめる機会とする

〔内容〕「パネルシアターと泡スライム」

ゼミ学生によるパネルシアター「おおきなかぶ」「しろくまちゃんのホットケーキ」

大きめのシアターが準備され、参加者全員が楽しめる工夫があった。また1年生のボランティア学生は2年生の手遊びやパネルシアター発表等の保育活動を実際に見る事ができ、学生交流の場にもなった。

作って遊ぼう「泡スライム」では、泡石鹸と洗濯のり等を使って簡単にできるスライムを親子と学生が一緒になって作る。

素材の変化や触感を通して子ども等から歓声や歓喜の表情が表れ、その姿に保護者や学生も共感するという光景を見る事ができた。

第2回 8月22日 教職センター(幼保)と屋外1号館前

〔ねらい〕簡単な制作と水遊びを楽しむ

〔内容〕「ペットボトルシャワーで遊ぼう」

ペットボトルを使った簡単な制作とそれを使っての水遊びを楽しむ。

教職センター(幼保)の教室にて制作を行い、後に屋外にてビニールプールを利用して水遊びを楽しむ。2Lのペットボトルにシールを貼り、シャワーを作る。水遊び後は家庭に持ち帰りお風呂等でも遊びが楽しめるようにし



図2 水遊びを楽しむ様子

た。初めての水遊び企画なので、短時間での取り組みにして安全面・健康面にも配慮した。コロナ禍の影響が残る年度であった為、大胆な水遊びの経験が無い子どもの様子が伺え、保護者にも喜ばれた。学生は、親子と一緒に過ごすことで少しずつ自己開示を進めている様子が見受けられた。

第3回 8月29日 屋外1号館前

〔ねらい〕親子や学生で水遊びを楽しむ

〔内容〕「プールで夏祭りをしよう」

ビニルプールやバケツ、たらい等を用意する。100均で手軽に購入できる水遊びのおもちゃの他、ビニル素材で簡単にできる金魚、ペットボトルの水車、的あて等スタッフが準備した教材を提供し、夏祭りのように楽しむ。

兄弟姉妹の参加者の中には、幼稚園の夏休みを利用して参加も多く家庭で中々取り組めない規模の水遊びができたことと好評であった。準備の途中では、学生へ水遊びについての安全面や注意喚起の内容を説明し、環境設定の配慮も一緒に確認できた。



図3 夏祭りを楽しむ様子

学生が加わることで、水遊びの楽しみ方も大胆かつ持続的になり、的あてや金魚すくいでも何回も心ゆくまで遊びが続いた。保護者からも「学生さんと遊ぶのを楽しみに参加している」という旨を直接やアンケートを介して伝えられた。また、学生からも「一緒に活動する（遊ぶ）ことを通して、心を開いてくれることがわかった」と手ごたえを得る感想もあった。

第4回 9月5日 1101教室

〔ねらい〕1～2歳児と室内遊びを楽しむ

〔内容〕「秋祭りをしよう」

お面の制作、魚釣りやペットボトルボーリング等を楽しむ。兄弟が幼稚園に通う月に入り、1～2歳児対象で参加者数も少なく、よりアットホームな活動を秋祭り風に準備する。

学生からは、同じ遊びを繰り返す中で「同じ遊びでもたくさん褒めたり、一緒に遊ぶ事でその遊びをもっと楽しめている。」また「自分（学生）の表情を見て、またやろうとしてくれる。」など色々な意見が寄せられた。

第5回 9月12日 1101教室

〔ねらい〕親子でリズム遊びを楽しむ

〔内容〕「親子リトミック」音楽担当教員が下記内容を実施した。

活動1 お母さんとおさんぽ

手つなぎや抱っこで歩く活動。音楽に合わせて歩く揺れのリズムにより、音楽の基礎であるビート（拍）を体感した。初めてリトミックに参加する子どもは、いつもと異なる雰囲気を感じ取り、保護者もその対応に困った様子であった。リトミックは無理にやらなくても良い活動であるとの説明後、参加していた保護者は一様に安心した表情となった。

活動2 いないいいないばあ

柔らかく透ける素材であるシフォンのスカーフを使用。スカーフで顔を覆い、バァと言いながらスカーフを取り除く活動であっても、視界を遮らないことで、子どもは恐怖心を抱くことなく活動することができた。またスカーフを両手のひらの中に丸めて隠し「バァ」と言いながら掌を広げ、スカーフの花を咲かせる（微細運動・感触遊び）活動では、大人のやっていることを繰り返し見て楽しむ子、子ども自身が真似をして、スカーフを真剣に隠そうとする様子が見られた。

活動3 落ち葉

画用紙で作られた落ち葉を集め“とんとんとん 葉っぱさん”“とっていれて”の活

動を楽しんだ。好きな形や大きさ、気になる色を集めて並べるなど、子どもによって異なる楽しみ方が見られた。

活動4 公園であそぼう

お母さんのおなかの上に寝転がって親子ラッコ、三角座りのお膝から滑り台、お母さんブランコやロケットなど、お家でも出来るような親子遊びを紹介した。



図4 親子ラッコをしている様子

リトミックは、参加者が他者の自由な表現を受け止め、共感する中で音楽によるコミュニケーションを楽しむことができる。子どもは興味が向けば参加し、参加しなくても目や耳からの情報や刺激により、子どもの様々な能力を育むことが期待できる活動である。

第6回 9月19日 教職センター（幼保）

〔ねらい〕ゼミ学生企画の援助

卒業論文のテーマに準じた内容で保育を行い、振り返りの一助にしたいとの要望を受け、企画の内容や当日の援助を行った

〔内容〕「卵の殻のオブジェ作り」

活動内容は、卵の殻に色を塗り、シールを張るなどコーティングし、オブジェを作る活動である。参加する1～2歳児に卵の殻で制作を試みる事は、現場では余り無い事なので学生らしい発想とチャレンジを受け止めて、取り組みを進めた。素材的には割れやすいので、ボランティア学生や保護者も配慮しながら進めたが、ゆったりとした雰囲気の中落ち着いて取り組むことができた。集団保育では

難しい内容も、「はまりす」では可能だと感じた。出来上がったオブジェを親子で大事そうに持ち帰る姿をありがたかった。

第7回 11月9日 教職センター（幼保）

〔ねらい〕1～2歳児と制作遊びを楽しむ

〔内容〕「牛乳パックの電車作り」

参加の子どもが全員男児で電車や車が大好きな事から、スタッフが牛乳パックとトイレットペーパーの芯を使った手作りおもちゃにシールや模様を加えて、自分の電車を完成させ、作ったモノで遊びを楽しむ内容。

保育現場では日常的な廃材利用は、保護者や学生の眼には新鮮で今後の参考になるとの声が多くあった。子ども達は、自分の手を加えた事で愛着が増し、糸状で引き車になっている汽車を嬉し気に、校内の廊下を何度も往復して喜んでいた。

第8回 11月16日 第一会議室

〔ねらい〕ゼミ学生企画の援助

実際の子どもの感覚、感触遊びから学ぶ
学生提供の感触遊びの支援と遊びの提供

〔内容〕「感触遊びをしよう」

紙粘土や紙プール、プチプチ・スポンジ等が張ってあるボードをゼミ学生が用意し、感触遊びを提供する。実際の子どもの様子から学びを振り返る。子ども達は、用意された感覚・感触遊びを手の平や足の裏、全身を使って楽しむ。家庭では味わう事のない教材の提供に、保護者も喜んでいた。また安全面での環境の設定や工夫について、ゼミ生やボランティア学生と確認する事もできた。

第9回 11月30日 第一会議室

「音楽Ⅱ」を履修している学生による表現活動を行った。音楽Ⅱの第7回から第9回の授業“器楽アンサンブル”において企画、練習を実施。子どものうたや教育小楽器を用い、学生の考えた創作ストーリーを発表する形をとった。

〔ねらい〕学生、保護者とともに音楽にのって演奏や手遊びをして音楽の楽しさを味わう

〔内容〕「秋の森へ遠足に行こう」

秋の遠足をテーマに森へ出かける。途中でいろいろな動物たちと出会い、手遊びや演奏をみんなで楽しむ。

表 3 音楽表現「秋の森へ遠足に行こう」

11月30日 Program

手遊び	はじまるよ
あいさつ	
歌	おべんとうばこのうた
身体表現	ガタゴトバス
お話	(パネルシアター)
手遊び	パンダうさぎコアラ
手遊び	げんこつ山のたぬきさん
うた	大きな栗の木の下で
お話	(パネルシアターとぬいぐるみ)
合奏	山の音楽家
読み聞かせ	「おいもさんがね」
ごっこ遊び	(絵本の再現活動)
	お芋ほり～焼き芋



図 5 山の音楽家を演奏している様子



図 6 焼き芋をしている様子

予定とは違う行動を起こした子どもに「それ違う」と発した事から子どもが泣きだし、周囲が困惑する場面があった。スタッフが間に入り、一つ前に集中して楽しんでいた遊びを提供した所、直ぐに気持ちが切り替えられ、喜んで遊ぶ姿に変わり取り組みを進める事ができた。このハプニングから、学生は「ダメ、と言う前に何がしたいのかよく観察する必要性を感じた」「予想外の行動があると分かった」等実体験を通しての学びが寄せられた。

第 10 回 12 月 7 日 教職センター(幼保)

〔ねらい〕季節感のある制作遊びを楽しむ

〔内容〕「クリスマスリースを作ろう」

室内のままごとや積み木遊び等に興味を示し長時間遊ぶ姿が見られる中、子どもの様子を見ながら制作に誘う。予め用意したリースの台紙にお花紙を丸めて貼り、シール貼りやポスカ等で描いて完成するリース作りをそれぞれ楽しんで参加する。校内を歩く事で満足を示す子どもには、家庭でも作ることができるようキッドを渡す。学生からも、様子を見て参加を促すスタッフの姿勢に、興味と理解を示す姿があった。

第 11 回 12 月 14 日 教職センター(幼保)及び 1101 教室

〔ねらい〕感覚あそびを楽しむ

季節感のある制作遊びを楽しむ

〔内容〕「風船マットの遊び」

「サンタの箱人形作り」

風船を使った真空マットやトンネルを使い身体感覚を試す遊びの提供と、空箱を使った簡単な制作を楽しむ。空箱は手を入れると人形劇の様な楽しみ方もでき、裏面はツリーになっているので、シールやスパンコール等を貼り飾りになる。玄関等に置いても良い物である。

第 12 回 12 月 21 日 第一会議室

色々な楽器を用いて楽器に興味を持ち、音楽に合わせて親子で楽しむコンサートを企画。前述の音楽表現同様、音楽Ⅱの授業で企画、

練習したプログラムをはまりすの活動として発表した。

〔ねらい〕 学生、保護者とともに色んな楽器に触れ、興味を持ち、良い音が出たことを認め、楽しさを共感しあう

〔内容〕 「クリスマスコンサート」

クリスマスにちなんだ曲で、鈴、タンブリン、トライアングル、ミュージックベル、サウンドブロック、ベルハーモニー、トーンチャイムの音色を楽しむ。

表4 楽器で楽しもう“クリスマスコンサート”

12月21日 Program

音源	さんぽ
トーンチャイム奏	ミッキーマウスマーチ
ベルハーモニー奏	ジングルベル
手遊び	きらきら星
ミュージックベル奏	きよしこの夜
歌と打楽器	おもちゃのチャチャチャ
歌と打楽器	あわてんぼうのサンタクロース



図7 ベルハーモニーを演奏している様子

第13回 3月12日 第一会議室

〔ねらい〕 親子で簡単な制作を楽しむ

〔内容〕 「センサリーボトル作り」

100～200mLのペットボトルと水・洗濯のりを使い、中にスパンコールやラメ等を入れてセンサリーボトルを作る。子ども達はスノ

ードームのような動きを不思議そうに見ていた。保護者は作り方を知り、兄弟にも作らせたいと語っていた。学生にはボランティアを急遽募集したが、学内の日程等を鑑みて希望者が現れ安堵した。

第14回 3月26日 第一会議室

〔ねらい〕 木のおもちゃや楽器を楽しむ

ミニコンサートを楽しむ

〔内容〕 「春祭り」

カプラやミッキィ（汽車セット）等良質の木のおもちゃ、音楽教員提供の音遊び教材（ベルハーモニー、ツリーチャイム等）普段とは異なるおもちゃ（教材）を提供して遊ぶ。子ども達は勿論、保護者も学生も一緒に楽しむ一日となった。また、学生は兄弟という年齢の異なる子どもの発達による違いも感じ、アンケートや日誌にも記載が見られた。

3. 参加した保護者・学生へのアンケート

3-1 アンケートの実施

本事業では、第1回より、保護者、学生の全ての参加者に活動後に自由記述のアンケートを実施している。アンケートは、保護者向けは「保育士の卵である学生たちとふれあってみていかがだったでしょうか。感じたことや気づいたことを率直にお聞かせください。」とし、また学生向けは「保育実践センターでのボランティアに参加してどうでしたか。実際に親子さんとふれ合って感じた事や気づいたことがたくさんあると思います。その思いを率直に聞かせください。」としている。今回、初年度に集まったアンケート学生37枚、保護者39枚からその内容について集計を行った。なお、保護者・学生ともに複数回の参加者がいるため、今回の集計では延べ人数を記し、自由記述の中に多くの種類の文章を記述した場合は同一用紙の中でも複数項目をあげて検証した。

表 5 学生アンケート集計

子ども理解・乳児理解・子どもの接し方	27	32.5%
子どもとのコミュニケーション向上	7	
子ども理解の深まり	7	
乳児の行動理解・発達理解	6	
年齢による違い・年齢に応じた接し方	4	
個別対応の大切さ	1	
子どもの遊び方を知った	1	
発達段階に合うおもちゃ	1	
プログラム・その中の企画に関すること	26	31.4%
企画に関わる喜び	5	
企画の反省	5	
活動の楽しさ	4	
子どもと関わる楽しさ	3	
プログラムの好評	3	
プログラムの反省	2	
複数回参加による深まり	2	
次回参加への意欲	2	
保育理解・保育課題・実習準備	20	24.1%
自己の保育課題の気づき	8	
実習等保育への準備・姿勢	7	
保育理解	3	
保育の向上(全体把握)・保育理解	1	
保育環境(危険な場所)への気づき	1	
子育て支援の場によってもたらされること	10	12.0%
親子の関わりを見ることができた	3	
スタッフや保護者などの見守りや関わり	3	
保護者の協力	2	
保護者の存在	1	
異年齢での触れ合い	1	
計	83	100.0%

表 6 保護者アンケート集計

全体評価・子どもの変化・保護者の気づき	24	30.8%
子どもの成長を感じた	5	
保護者も充実した時間を過ごした	4	
複数回参加による成長や学び	3	
子どもにとって良い経験	3	
子どもが満足している	2	
学生への機会の提供	2	
雰囲気が良かった	1	
家庭保育の助けになる	1	
次回参加への意欲	1	
幼保学生を子育ての参考にしなかった	1	
様々な年代との触れ合い	1	
プログラムや企画内容・おもちゃについて	24	30.8%
プログラムが良かった	8	
プログラムに子どもが満足した	5	
手作りおもちゃが良かった	4	
季節にあったプログラムが良かった	3	
プログラムが家庭保育に参考になった	3	
プログラムの改善	1	
ボランティア・スタッフについて	22	28.2%
学生ボランティアに子どもが満足	11	
スタッフと学生の対応が良かった	5	
学生ボランティアの未熟さ	3	
スタッフの見守りが良かった	3	
設備・広報・主催者について	8	10.2%
設備の充実/敷地内の立地の良さ	4	
部屋の広さが欲しい	1	
大学主催に安心感がある	1	
運営の改善	1	
広報の充実	1	
計	78	100.0%

3-2 学生アンケート結果

学生から集まったアンケートは延べ 83 項目で 25 種類の意見に分類した。またそれを 4 つの大きなカテゴリーに分けた。その中では、「子ども理解・幼児理解・子供への接し方」や「保育理解・保育課題への気づき・実習準備」と、子ども理解や保育に関する記述が半数を超えた。学生自身が非常に関心を持ち、また本事業に参加する意義をそこに見出していることが窺い知れる。その他に、プログラム全体やその中の企画に関わった反省点などが 3 割、子育て支援の場によってもたらされる気づきについての記述が 1 割程度となった。

学生アンケートの結果から読み取れることは、実習などの今後の保育に生かされる経験や能力の向上を視野に入れて活動している姿、自らの保育の課題を明確化し、子どもとのコミュニケーションの方法を実践の中で獲得する姿、子ども理解や保育理解の向上、保護者との触れ合いや保護者の協力によって保護者の子どもに対する姿勢など保護者理解につながっている姿、プログラムそのものの運営や実施した企画への反省点などに自ら気がつく姿であった。また活動そのものに純粋に楽しさを感じている学生が多く、ボランティアに再度入りたいという意見もあった。

3-3 保護者アンケート結果

一方、参加された保護者のアンケートは78項目が上がり、28種類に分類することができた。大カテゴリーを4つに分けた中で、プログラムや企画内容に触れた記述が3割、参加した我が子の成長を喜ぶ姿、自分自身も楽しめたなどの評価が3割となっており、その合計で6割となる。学生ボランティアやスタッフについての記述が約3割近く、その他に設備や運営について記したものが約1割であった。手作りのおもちゃの提供、またその持ち帰りを高評価しているもの、学生ボランティアやスタッフの好印象について記されたものも多く、学生よりもさらに幅広い内容の意見が記されていた。

4. 2023年度の各教員・指導員の振り返り

4-1 保育実践センター長 那須

保育実践センター「はまりす」の初年度2023年度は、まだコロナ禍の影響が残る年度であり、感染症対策や受け入れ時の健康面、環境配慮も苦慮を要しながらの開始であった。

一般的な子育て支援センターとは異なり、開催回数や設備面では不十分さはあるが、幼児教育・保育や初等教育を専門に学ぶ学生にとっては、貴重な体験と振り返りができる場としての「はまりす」の存在は徐々に大きなものになっていった。

年度を通して、回を重ねる事で子ども達が「はまりす」に慣れ、学生に親しみを感じて遊ぶ様子が伺えた。保護者は、子どもが自分から離れて学生等と遊ぶ姿に成長を感じたとの意見があった。学生も子どもや保護者の様子を観察して、遊びを介して距離を縮める事や、子どもと共感する経験を体験できたと考え。保護者からは、テクニックではなく、真摯に誠実に子ども達と関わろうとする学生の姿に好感を覚え、「今日もお兄ちゃん、お姉ちゃんと遊ぼうね」を合言葉に家から出発したと伺う事が多かった。また、遊びの内容

や実践センターの雰囲気「ふわっとしていて温かくとても居心地が良い。」「子どもの様子を見守り、遊びたい気持ちを受け止めてくれるのが嬉しい。」との言葉もよく頂いた。

本学科の卒業生の大半は、幼稚園・保育所・こども園又は小学校や特別支援学校という子どもや保護者と関わる現場に就職している。そこでは子どもの保育・教育のみならず、保護者支援、家庭支援が業務の一環となっている。学生にとって実習等でも経験することが少ない「保護者対応」については、未知に等しい領域であり、メディア等から得る情報により「大変らしい」「難しい様だ」という感覚だけが先行しがちである。

「はまりす」は回数は少ないが、親子で一緒に遊ぶ中に、学生として加わる事で直接親子関係を学べる機会になるだけでなく、その保護者から見守ってもらい、励ましや感謝の言葉を頂く事で、学生自身が安心して子どもと関わる経験となっている点に注目したい。学生自身はまだそこまでは意図してはいないが、子どもを介してあるいは直接保護者とやり取りできる「はまりす」は、地域の親子から学生が学び、ある意味、人間関係の化学反応が起きる場ではないかと思う。今後は子どもも保護者も学生も“主体的な遊び”を軸に互いが楽しく学び、成長できる場としての存在意義を増していきたいと考える。更には、体験で終わるのではなく、アンケートやボランティア日誌等を基に振り返りを言語化し、共有化を図る中で「子ども理解・保護者理解」を深めていける場としても期待したい。

4-2 音楽・リトミック担当 中楯

これまで1年後期に保育士資格の選択授業として配置されていた「音楽Ⅱ」では、楽器の扱い方や奏法の学習を通して、現場で想定される発表会等に対応するための内容が組まれていた。学生はグループ毎に練習したものを互いに発表、選曲やプログラムにおいては

対象年齢の設定を見誤るケースが多かった。

保育実践センターにおいて、実際に子どもを前に発表するという目標ができたことで、前年度の同授業と比較し、学生自身が授業外でも自主的に話し合いや練習の場を持ち、月齢に応じた発達に興味を持って選曲するなど、主体的対話的で深い学びの場となった。

授業内に行った振り返りでは、学生が保護者や担当教職員のサポートに助けられるなど、生きた学びを通して、幼保職への希望や自己肯定感が高くなったことが分かった。また実践の場が学内にあるため、空きコマなどを利用して次年度以降も積極的に関わっていきたいなどの声があがった。

演奏だけでなく、様々な要素が含まれる音楽教科においては、はまりすでのワークショップ的实践の積み重ねが、保育現場への第一歩になることが明らかとなった。

4-3 保育実践センター指導担当 加子

これまでの生活経験として幼い子どもと触れ合う環境になかった学生が多く、自身も遊びそのものの実体験が少なくなっていると感じた。そうした中で、「はまりす」は大学内に設置された行きやすい場所であること、人数が少なく目が届きやすいこと、教員が隣にいる安心感もあり、学生にとってはハードルが低く、ボランティアの参加をととても喜んでいる姿があった。利用者と一緒に折り紙や遊びを教えると純粋に喜んでおり、保育現場への最初のアプローチとしては良い活動だと思った。主として参加した1年生の関わり方は、不慣れなこともあり保護者にとっても未熟さを感じる部分はあったと思う。しかし、利用された保護者はとても好意的であった。学生の緊張や楽しみ方を含めた素直な反応を我が子の様に見守ってくださっていた。そして、このような経験を積んで保育士になっていくという過程を目の当たりにして感心する姿があった。もちろん反省点も多いのだが、

利用者は、学生が前に立ち一生懸命に活動を進めていこうとするイベント形式の物をととても喜んでいた。

今後、参加した学生が楽しただけで終わらないように、アンケートを基に感じた事を率直に話し合える場や時間を充実させる必要がある。アンケートに書かれている内容をきちんと意味づけ、乳幼児の理解や保育への理解が深まるよう助言をし、学生の学びにつなげていきたいと考える。

4-4 幼児教育・保育専攻長 覧

本事業について、幼児教育・保育専攻等の子どもと関わる職を目指す学生が関わる意義として、下記の二点が考えられる。一点目は、保育の展開のための素地としての基本的な姿勢を培うことである。本学の教育課程では、2年次の2月に最初の実習を経験する。その時まで実習に対する姿勢、子どもに関する実質的な理解、自分の関わり方や声掛けなど、講義だけでは理解しきれない内容を学んでおくことが重要である。本事業の中でもまだ言葉を理解しない小さな子どもにどのように接したら良いか困惑したり、親子を前に緊張する様子から始まり、次第に保護者の温かい眼差しに見守られながら少人数での関わりの中でコミュニケーションができるようになっていく学生の姿が見られている。お互いが受け入れられる雰囲気の中でステップを踏んで子どものいる場所に慣れていけば、コミュニケーションに苦手意識を持つ学生でも十分自信をつけて実習に臨めると考えられる。

二点目は、将来保育者になる学生が子育て支援に関わることである。子ども・子育て支援法が2003年に施行されて地域子育て支援事業等が市町村主導で行われ、家庭で保育を行っている親子への支援が推進される状況になった。さらに2023年に閣議決定された「子ども未来戦略」では「すべての人が身近な場所でサポートを受けながらこどもを育てられ

る」ことが日本の子育ての原則の一つとなるように記されている。子育て支援の専門家としての人的資源は、保健師・助産師・看護師の他に幼稚園教諭・保育士も想定され、保育者にも子育て支援に関する能力が求められ、園で預かっている時間の子ども達のことだけではなく、保護者の姿を知り、子育てに対する想いを理解する姿勢が必要な時代になったといえよう。子育て支援は、これから保育者を目指す学生にとって重要な視点であると言える。

なお、大学の実施する子育て支援について南元子（2019）は、「園長経験者であるベテラン保育士、子育て経験はないが保育を学んでいる学生たち、保護者と未就園の子どもたち、といろいろな層の人たちが交わる」⁴ことができ、子育て支援全般の持つ「『支援』という言葉が暗黙の裡に設定してしまう微妙な上下関係」⁵を若くて未熟な学生が解消する契機を作っているとしている。そして多くの保護者にとって「自分の子育てに対して評価するのではなく、むしろ興味をもって耳を傾ける学生との対話がストレスの軽減や日頃行っている育児への自信につながる」⁶としている。保育者・教育者養成校を地域に開く子育て支援について、ここにも意義が見出せるといえよう。

今後の課題としては、学生も保護者もデジタル世代となっていく中で、参加募集や広報活動へのデジタルコンテンツの活用が考えられる。学生ボランティアでオンライングループを立ち上げたり、若い世代の保護者が活用している SNS など外部向けの発信を行うことを検討する。

保育者養成を中心にした学生の実践力強化を目的にスタートした本事業であったが、実践でのエピソードやアンケートの結果から、当初の目的の他にも様々な波及効果をもたらしていることがわかった。これからも本事業を定期的に振り返り、本学教育課程に貢献できるための最適化を目指して進めていきたい。

引用／参考文献

- 1 緩利識・名倉一美・田嶋善郎（2012），教育実践力向上を目的とするDiCoResプログラムの開発，浜松学院大学学習支援センター紀要，第3号，23-39頁
- 2 名倉一美・緩利識（2014），教育者・保育者を目指す大学生による子ども対象のイベント実験型活動の成果と課題—DiCoResミュージアムを事例として—，浜松学院大学地域共創センター紀要，第2号，11-30頁
- 3 池谷美衣子（2015），実践活動のカリキュラム化とその「学習成果」—地域開放型イベントの企画実践を対象に—，浜松学院大学地域共創センター紀要，第3号，19-30頁
- 4 南元子（2019），「子育て支援」は誰のため？ — 母親が求める子育て支援はどうあるべきか — 名古屋芸術大学研究紀要，第40 巻，282頁
- 5 前掲書4，282頁
- 6 前掲書4，282頁

* 本文内の写真については、被撮影者の許可を得て掲載しました。